

闇の蛟竜

津本 陽



文春文庫



文春文庫

闇の蛟竜

定価はカバーに
表示してあります

1983年8月25日 第1刷

1990年2月20日 第4刷

著者 津本 陽

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-731401-0

文春文庫

やみ 闇 の 蛟 竜 こうりゅう

津 本 陽



文藝春秋

長歴
篇史

闇
の
蛟竜こうりゆう

第一章

拭ったように、雲の片影もない空に陽が照りわたり、うねりを刻んで南を指す海流は、指を浸せば染まるような、あざやかな紺碧をたたえていた。

澄みきった早朝の空気のなかで、衣服の色彩が、燐光を帯びたかのように、際立ってくる。濃紺の上着に身を包み、ブリッジの窓枠に逞しい肩を凭せかけていた船長が、灰色の瞳を据え、葉巻の煙をゆっくりと吐いた。

三千屯のイギリス貨物船は、軽い横揺れをくりかえしながら、まっすぐ長崎湾口に向っていた。東海佐一郎は、真南の水平線に、伊王島の影が浮きあがってきたときから、航海長にかわって、舵輪を取っていた。

縦深二里に及ぶ長崎湾の湾口は、伊王島、香焼島が南北に横たわり、その間を数多い小島が埋めているので、海上からは入港の航路が見分けにくい。三年前龜山社中、海援隊の航海士官を務め、その後も外国貨物船の水先案内人として、隔月に長崎を訪れている佐一郎には、通いなれた心やすい眺めであった。

明治三年十月も半ばに近い角力灘を、肌に心地よい冷涼の東風が吹き渡っていた。ことしは、

おくんちを見逃した、と佐一郎は考えていた。

長崎六十三町が挙げて参加する、諏訪神社の祭礼の日を、佐一郎は例年、支那寺と呼ばれる崇福寺に近い山手の、長尾元右衛門の邸で迎えることにしていた。

元右衛門は、安政年間、勝安芳、榎本武揚、五代友厚らとともに、長崎海軍伝習所において、オランダ海軍術を学んだ薩摩藩士で、いまは長崎外国物産仕入方を務める身分であった。

佐一郎にとって、元右衛門は神戸海軍操練所、海援隊を通じて、航海運用術、測量術等を授けられ、維新の動乱とともに切り抜けてきた恩師であった。彼はまた外国船主の組合に交渉して佐一郎の現在の仕事を月俸百五十両という破格の待遇で周旋してくれていた。

二本マストの汽船は、煙突から猛々しく黒煙を吹きあげながら、追風に乗った快速で、いくつかの岬の沖を過ぎ、伊王島の水道に入ると、船首を東に向けた。

灘内の海面が急におだやかになり、池のように平らな海水をたたえた長崎湾が、目の前に長く伸びひろがった。汽船は、小瀬戸の高見台の沖を過ぎる辺りから、佐一郎たちの体を震わす、底強い汽笛の吹鳴を、間を置いてくりかえし、左右の山肌に反響させた。

きれいに耕された段々畠が、山の斜面に伸びひろがり、鋤に凭れた老爺が手を振っていた。藁屋根と瓦屋根のいりまじった集落があらわれ、波打ち際を子供の群れが駆けていく。頑丈な石堀をめぐらした、大きな庄屋の家があり、高処には砲台、水際には回廊をめぐらした異人屋敷が、栈橋をつきだしているのが見えた。

小菅修船場の前を通り過ぎると、湾を取りかこむ斜面を埋める、長崎の町並みが、はつきりとあらわれてきた。朝日を受けた稲佐山が、濡れた動物の背中のように、したたる緑と末枯れた葉の色を、まだらに際立たせていた。

アメリカ、ロシヤ、清国など、それぞれの国旗をマストに翻す十数隻の汽船が、湾内に碇泊している。

機関を停止し、惰力でゆっくりと動いてゆく佐一郎の汽船に向って、夥おびただしい数の曳舟が、岸壁のあたりから、先をあらそって漕ぎ寄ってきた。

佐一郎は、大浦下り松運上所さが（税関）を出ると、南山手居留地を右手に見て、狭苦しい民家が、隙間もなく両側に建てこんだ坂道を登っていった。元右衛門の屋敷を訪れる前に、彼は海援隊以来の部下であった四ツ本季芳に会い、預り物を手渡さねばならなかった。

一間幅の、道路の舗石はなめらかに磨りへっていた。厨くりやの流し水が、ときたま道の脇から、しぶきをあげて降りかかる。戸毎に犬猫がうずくまり、魚臭と廁かわやの臭いがいりまじって、ただよっていた。

声高に喋りながら往き来する男女が、ラシヤ地の洋服を着た佐一郎を見ると、腰を屈め、「よかお日和で」と挨拶をした。

やがて勾配の急な石段を、幾度か折れ曲って登った台地に、垣根をめぐらした広い前庭を控えた、新築したばかりの、平家の屋敷が現れた。

冠木門かぶきもんの脇に、着流し姿の男が立っていて、佐一郎を見ると、「お待ちしていました」と、齒を見せた。四ツ本季芳であった。鹿兒島の郷士である季芳は、文久三年、十六歳の佐一郎が、紀州藩から神戸海軍操練所へ学んだとき、練習船觀光丸の水夫長を務めていた。翌年、操練所が閉鎖したあとも、二人は元右衛門と行動を共にし、明治二年の戊辰戦争・函館の戦いが終るまで離れることがなかった。

「まあ、ようお越しやして」と、季芳の妻卯乃が、女中とともに玄関に出てきた。

「さあどうぞ、奥へお通り下さい。昨夜から酒の支度ば、しとりますけん」

季芳は賑やかな笑い声をたて、ほの暗い奥の間に佐一郎を案内すると、襖を閉め、向き直った。

「お持ち頂けましたか」

頬が殺^そげ、顴骨^{かんこう}の張った季芳の太い眉の下で、眼が光った。うむ、と佐一郎はうなずき、上着を脱ぎすて、チョッキのボタンを外し、腹に巻きつけていた、ずっしりと重みのある、白木綿の袋を取り出し、季芳に手渡した。

「いつもながら、かたじけないことです」

季芳は早口に礼をいい、ふりむくと長押^{ながし}に手を触れ、一尺ほどの長さの部分を外し、その奥の暗い空洞に袋を納めて、長押を元通りにした。

佐一郎には、中味が何であるか知らされていなかったが、やわらかい手触りから、粉のようなものであることは、想像できた。

前年の秋、上海、長崎、神戸を往来する外国船主組合に雇われ、水先案内人になってから、彼は季芳にその正体のしれない袋の密輸入を、依頼されるようになっていた。

佐一郎が上海に到着すると、決して藍^{ラム}という清国人が宿舎にあらわれ、袋を佐一郎に托して立ち去った。

長崎港運上所の下役人は、前年まで紀州人ではあるが薩摩藩軍艦春日の士官役を勤めていた佐一郎をおそれ、身体検めをすることなく上陸を許すので、袋は彼の乗る汽船が長崎に寄港するたびに、難なく季芳の手に渡った。

「風呂を沸かしとりますけん、さっと浴びなはって、酒にしまっしょ」

佐一郎は、檜の高い香を放っている湯殿に案内され、どっと湯をあふれさせて浴槽に身を沈めると、高窓から射しこむ朝の光りに、茫然と目をやった。

贅肉のついていない彼の五体は、若い獣のように柔軟で、鑿^{のみ}で穿ったように陰影のあざやかな筋肉の隆起が、剽悍^{ひょうかん}の気配をただよわせていた。

右肩に丸く火傷の痕に似て盛りあがった鉄砲傷、右脇腹を長くえぐった刀傷が、湯に漬ると紅の色を濃くした。いずれも季芳とともに戊辰戦争に参加した折、受けたものであった。

佐一郎は、鷹のように鋭い眼を宙に遊ばせ、たちのぼる湯気を嗅いだ。いいにおいがしていた。何だろうと、胸をふくらませ空気を吸いこむ。彼はにおいを嗅ぎながら、漠然と悲哀の感情が、体を包んでいるのを感じた。

木犀^{もくせい}のにおいだ、と佐一郎は気づいた。さわやかな酸性のにおいを嗅ぎながら、彼は幼い頃の母親の体臭を、覚えずまきぐっていた。

佐一郎は、七歳の冬に流行り風邪で母を亡くしていた。紀州藩御用達の薪炭問屋であった名草山に近い生家は、敷地が三千坪を越す邸で、塀を取り巻く外濠が、青みどろの水をたたえていた。江戸黒と呼ばれる鍍^{くわ}仕上げの漆喰壁が、朝日を受けると、鏡面のように漆黒の輝きを反射した。佐一郎は、着物の裾を長く引いて、足音を立てずに廊下を行き来していた母の追想に耽りながら、長途の航海による疲労が僅かずつ湯に流れ出てゆくのを感じていた。

湯からあがると、季芳と卯乃が、酒肴を用意していた。仲間が顔を合わすと、時間を撰ばず酒を汲むのは、海援隊の頃からの習慣であった。

「こんどは長崎に、幾日ご滞在ですか」

「あさっての朝出帆して、神戸へ行く」

「それでは、ゆっくりして頂こうと思ったが、そうはいかんですなあ」

佐一郎の盃に酒を満しながら、卯乃が溜息をついた。

「神戸や大阪へ、しょっちゅう行かはるなんて、ほんまにうらやましいでんなあ。私ら、一昨年
から帰ってへん。この人に、いっぺん里帰りさせてほしいと頼んでも、忙しいいわれたら、それ
でおしまいですもんなあ」

卯乃の郷里は、大阪北野の在であった。季芳と知りあったとき、彼女は南地なんちの色町で、全身に
彫りこんだ桜吹雪のいれずみが、評判の娼妓であった。

「季さんは、ほんまに忙しい身やからなあ。表向きは海産物問屋でも、裏では何かしらんが、い
ろいろやってるわな。俺もこのごろの季さんの正体は分らん。のう、そうやろ」

「いや、そげんいわれると、身も蓋もなかですばってん、東海さんには頭は上げられんとです」
春雨通りの店に、十人ばかりごろついている浪人諸君がいるが、何の食客かね。この春に、大楽だらく
源太郎に従うて暴れた奇兵隊の落武者か、熊本城下の敬神党の連中かと、目星はつけてるがね
え」

「いや、まあその話は止めときんしゃい。お神酒みきが冷えますけん、ちつくと参らにゃ」

「ほんまに、この人の時勢狂いもほどほどにしてもらわな、万一小上に謀反人かみとでも思われたら、
たちまちさらし首でんが。まあ、私もそのときは、いっしょに獄門台までついて行くよって、よ
ろしおますけど」

「いやあ、責むるな、責むるな、と季芳は頭をかかえ、佐一郎の腕にすがりつき、酒がまずうな
る、と顔をしかめるようにして笑った。

佐一郎は、白い歯並みの日立つ、四歳年長のこの男が好きであった。いつも彼と夜明しで飲め

ば、胸を塞ぐ思案ごとはすべて、はるかな虚空へと吹き飛んでいった。

佐一郎の推量によれば季芳は、清国船相手の抜荷買いをやっており、彼の背後に控える金主元は、佐賀熊本辺の不平士族の縁につながる者のようであった。

「なに、目付か胡乱者改めかしらんが、捕まえられて、チョンと首切られて獄門に架けられたら、飯食う手間も、あれする手間も省けて、楽にない申す。わしゃ、生きちよる間は旨い物食うて、卯乃に可愛がってもろちよれば、それでよか。死ぬというてん、たいした事はなか。好きなことやって、卯乃といっしよい死にゃ、文句はなかよ」

季芳は荒びた仕草で脂濃い唐人料理をむさぼり食い、香りの高い老酒をあおった。

「時弊十条ちゅうのを、東海さんはご存知ですか。旧幕府の悪弊、暗に新政府に移り、昨日非とせし者、今日却って是となす、細にその条目を挙げん。輔相以下奢靡驕逸に耽り、上は朝廷を暗誘し、下は衆庶を凍餒に陥らしむ。是其の一なり。大小官員、外は虚飾を修め、内は名利を貪る、是其の二なり」

季芳は血走った眼を宙に据え、七月に政事を批難して割腹自殺した、東京田口塾塾生横山正太郎の書き残した建議書の内容を暗誦しはじめた。

「朝に令する処、夕に之を替え、民適行するを知らず。之を要するに牽強附会にして、実心を操り、以て事に処すること能わざるに因らずんばあらず、是その三なり」

佐一郎は、季芳のそらんじる言葉を聞きながら、とろけるような酔いが、けだるく手足の力を弛めてゆくのを感じていた。

「東海さん、いまの新政府は、横山のいう通りですけん、ぶっ潰さにやいかんなあ。やつらは国益を私して、毎日供揃いで吉原に繰り込みにゃ、一人前でないとも思うちよいげな。見っちお

れ、いまに坐つとる畳ば、ひっくりかえしちやる」

佐一郎は、本心では政争に興味がなかった。権力を目指す欲望を燃やす男たちに、どのみち正義はない。彼らは目的のために他人を利用し、必要がなくなれば、恩人をも平然と抹殺する。口々に大義名分を唱える者に限って、内実は道義を踏みにじって恥じない破廉恥漢が多い。

戊辰戦争の戦端が開かれた時には、佐一郎も薩摩藩士として従軍し、函館の戦いでは、銃火に曝されながら、数度の目覚ましい戦功をたてた。だが、彼は、出世だけを夢みて戦場に命を賭けたのではなかった。停滞と愚劣の充満した旧制度を打ち破り、新しい時代に導くことが、自分の義務である、官軍は日本の国を封建の暗黒から解放する、救世主でなければならぬと信じていたのであった。

「まあ、よかよか。酒をくろうちよるうちは、何も彼も忘れまっしょ。おい、お卯乃、三味弾^ひいってくれ、歌うたいとうなったわい」

「寺もないのに大徳寺、平地のところを丸山と、古いお宮を若宮と、桜もないのに桜馬場、北にあるのを西山と」

佐一郎の体を、酔いがゆっくりとめぐっていた。彼はグラスにたたえた濃いねばりのある酒をあおり、焦点の揺らぐ眼を据えて庭を眺めた。

色の薄い赤とんぼの群れが、澄んだ空気の中に浮かんでいる。このままどこへも行かず、長崎にとどまりたいという願いが、佐一郎の頭をかすめた。町なかにも樹木が豊かに繁り、四季の花に恵まれ、おっとりとした人なつこい顔つきの犬猫や牛馬が道を歩む長崎で、静かに暮らしていたと思った。

佐一郎がそう思うのは、和歌山の兄から彼のもとへ、火急の相談があるので取急ぎ帰ってほし

い、という手紙が届いており、ともすれば頭を擡もたげようとする不安を、抑えていたからであった。「季やん、俺はしばらく長崎には来れんかも分らんぞ」

佐一郎は、盃を置いて季芳を見た。

「何とですか。来月の回船には、乗らんとですか」

「うん、先月和歌山の兄から、火急の要談があるんで、帰ってこいち云うて、書状が来た」

神戸の宿舎に届いた手紙を、佐一郎は上着のポケットに入れたまま、上海行きの汽船に乗った。そのときから、すでに一カ月が経っていた。

「火急の要談と、そりやただごとじゃなかと。急ぎ帰ってあげたもんせ。じゃっどん、困ったもんよのう。貴方あなたの仕事場狙うちよる、あぶれ船乗りが多いごとあるけん、和歌山にや長居は無用ですぞ」

季芳は胸をつかれたような覚めた顔つきになり、てのひらで口もとの滴を拭った。

二年前に佐一郎の父が亡くなったあと、薪炭問屋は兄の鉄之助が継いでいたが、内気な性格で、事実上大世帯を切りまわしているのは、父の代から勤めている番頭たちであった。

父が亡くなったとき、佐一郎は、親族たちに、和歌山に帰って、鉄之助と共に家業を盛りたててほしいと、頼まれたが、彼にはそのつもりはなかった。

商人の家に生れながら、なぜか商売にはなじめなかった。狡猾なかけひきをする男たちのまなざしや、いやしい手つき、歯屎はそのにおいのする吐息、などを思うだけでもいやになった。

小金を儲ける者、大金を手にする者、それぞれ、それなりの賤しさに、骨の髄まで浸っている。死ぬまでの時間を、他人をだまぐらかし、金子きんすを手に入れることだけに熱情を燃やし続ける、虫けらのような商人になる気は、まったくなかった。

「季やん、もちろん、俺もその斟酌^{しんしゃく}はしておる。兄の要談とは、およその察しはついてるんじや。商売に力貸せち云うことよ。しかし俺は、いまさら一文銭^{いちもんぜに}勘定する気はないぞ。兄貴が商売を嫌じゃというのなら、店仕舞いさせてもやるよ。どうせ露の命やのに、気に染まん日送りすることはないからなあ」

佐一郎は、故郷を離れて暮らしている月日のうちに、過去の係累に蜘蛛の巣に搦めとられるように縛られることなく、自由で居られる楽しさを知った。大海を泳ぎまわるように、世間を歩きまわることが出来る。和歌山城下の狭苦しい社会に育った自分の、みじめたらしい幻を振り棄て、英才勇夫にたやすく変身できる。

「兄貴も長崎に連れてきて、医業を学ばせるか。臍の緒切った土地で、うじうじと鬱屈しておっても、はじまるまい」

「早う帰ったもんせ。まあひと月じゃ。そのうえも去^いんでおれば、ああたの仕事場は無くなるけん。早うせにやいかん」

「いかさま、季やんのいうように早う帰ることにする。ほなこころで長尾先生のお屋敷へ帰省せないかん説明^{ことわり}に行ってくるよ」

「そうしんさい。そうして一日も早う戻ってくんしゃい」

季芳は、佐一郎の手を痛いほど握りしめた。

文久三年の秋、十六歳の佐一郎は、蘭学を学びたいばかりに、遠縁の紀州藩士の養子となり、藩校を経て神戸の海軍操練所へ遊学した。元右衛門は操練所教授^{かた}方であった。

いま元右衛門の屋敷へ向いつつ、佐一郎ははじめて元右衛門の、布引の役宅へ遊びに行った日

のことを、思い出していた。四歳年長の陸奥小二郎（宗光）に伴われて行ったのであったが、才氣走った小二郎が、短い江戸遊学の間に習い覚えた、危うい関東弁でまくしたてるのにひきかえ、佐一郎は一言もしゃべれなかった。

薩摩藩外国掛として、勤王志士の間に名の高い五代友厚の朋友であり、幕臣榎本武揚らとともに、安政年間に長崎伝習所で海軍術を修めた元右衛門の居間に坐っているだけで、佐一郎は気が臆した。

大柄な元右衛門は、度量も広いように見えた。年少の生徒である小二郎が、安井息軒塾に学んだ頃の見聞を、饒舌に話すのに、すなおに耳を傾け、おもしろがっているようであった。

元右衛門の妻照は、遠慮がちな佐一郎の気を引き立てるように、なにかと話しかけてくれた。「東海君の母上は、おいくつになる」と元右衛門にたずねられ、「七つのときに、他界いたしました」と答えると、照は同情したようにうなずいていた。

元右衛門の娘織衣が挨拶に姿を見せた。佐一郎は固くなって、正面を向いたままだった。目のはしに、深い紅色の羽織が見えた。

「ようこそ、おいでなさいました」

澄んだ声が聞え、佐一郎は思わず顔を向けた。色白の少女が、彼を見てほほえんでいた。佐一郎は体のしびれるようなつよい羞恥に目がくらんだ。織衣は、そのとき十二歳であった。

それから七年、彼は、すでに二十三歳になっていた。外国船の操船を心得ている民間人は、僅かなものである。いずれ競争者があらわれてくるとしても、それまでに過分の俸給を貯蓄し、長崎で医術を修めようと、彼は自分の将来を描いていた。医家としての成業を遂げた後は、長尾家の養子となり、織衣と暮らすのが、彼のひそかな念願であった。織衣はもう十九歳になっていた。